

# AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD.

国際耕種株式会社

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

TEL/FAX: 042-725-6250

E-mail: aai@koushu.co.jp

## スパイス王国ザンジバル

ここ数年、タンザニア国で実施されている全国灌漑マスタープラン調査に調査団員として参加し、活動の一環として数度に渡りザンジバルを訪れる機会を得た。中近東地域での経験が長かった私にとって、ダウ船での交易によって古い時代からアラブ地域と交流のあったザンジバルを訪問する事は長年の夢であった。ザンジバルは主にウングジャ島とペンバ島という二つの島から成り、ウングジャ島の西に突き出た半島にはストーン・タウンと呼ばれる中心地があり、アラブ風の古い家が軒を連ねている。入り組んだ町並みに足を踏み入れると、オマーンやイエメンのスークを歩いているような錯覚に陥るほどである。また、スワヒリ語はもともとアラビア語の影響を強く受けているが、本土に比べてザンジバルでは特にアラビア語を身近に感じた。

ザンジバルといえば昔から各種スパイスの生産地として有名で、特にクローブの輸出は長い間ザンジバルの経済を支えてきた。しかしながら、世界市場における競合や植物体の老齢化あるいは病害虫による影響等が原因となって、クローブの生産は急速に衰退しつつある。さらに、島内の人口増加は限られた土地資源の劣化に拍車をかけ、表土の流出と集水域の乾燥化もクローブを含めた永年作物の生産に悪影響を与えている。こうした状況下でザンジバル政府は 1991 年以降、クローブに代わる新しい換金作物を模索しているものの、これまでのところ適当な作物は見つかっていない。

一方、ザンジバルは青い海、白い珊瑚礁と豊かな緑に恵まれ、島内にはアラブ支配者の宮殿跡や奴隷貿易時代の旧跡が散在しており、これらは重要な観光資源となっている。観光客むけにスパイス・ツアーが準備されており、各種のスパイスが育っている姿を見学できる。私が参加したツアーでは、数時間の見学で 30 種類以上のスパイスや果樹を観察する事が出来た。農園では、クローブ、シナモン、ナツメグといった木本類に加えて、カルダモン、アニス、ターメリックといった一般的な香辛料あるいはドリアンやジャックフルーツといった果樹も生産されている。

今後のザンジバルにおける農業あるいは地域開発の方向性として、観光開発との融合が重要な課題になると考えられる。クローブに代わる換金作物を輸出するのではなく、スパイス王国としての歴史的な価値をより有効に活用すべきだと思う。また、ホテルやレストランへの生鮮野菜の周年供給は観光開発にとって大切な筈である。そのためには農家に対するインプット支援と産直を結びつけた活動も考えられる。現在実施中の灌漑マスタープランでも、こうした農業及び観光開発の融合における灌漑開発の果たす重要な役割を強調した。観光と農業の調和のとれた開発をすることによって、スパイス王国としての景観を維持しつつ、ザンジバルに住む人々の生活が少しでも改善されていくことを心から祈りたい。

(ザンジバルにて:大沼)



クローブ



シナモン



ナツメグ



カルダモン



アニス



ターメリック

## 新シリーズ：「人造り・人材育成」ー研修業務への我々の取り組みー

### 第1回：はじめに

今日、途上国に対する「人造り」は国際協力の分野ばかりでなく、教育、産業活動など広い分野でその重要性が取り上げられている。教育分野では知的国際貢献の見地から、留学生受け入れ枠の拡大が図られている。また企業活動においては海外での製品生産の品質管理上、現地での人材育成を行っており、結果的に現地の技術力の底上げと地域の産業育成に貢献してきている。国際協力分野での「研修」は目新しいことではないが、その重要性や必要性が再確認されており、技術研修員受け入れ、開発調査や技協プロジェクトなどでの OJT によるカウンターパートへの技術移転、第3国研修、青年招へい事業、民間 NGO や地方自治体とのパートナー事業など様々な活動が行われている。さらには、日本で技術を学んだ技術者が類似した地域環境(自然、文化、言語)を持つ近隣諸国で技術を移転するという南南協力なども行われている。

この背景には、国際協力の原点の一つとも言える「人造りを通した国造り」という基本的な考え方もあるが、それとともに研修事業によってより機動的で直接的な援助が可能であるという戦略的な意図もある。また日本における研修では、新しい技術や考え方の習得だけでなく、日本の経験を途上国に伝えるということも期待されている。さらには、研修活動による人的交流を通して二国間の友好協力関係を築き上げ、武力によらない国際協調関係構築に貢献できるものと考えられる。つまり、研修員は自国で応用可能な技術を学びながら、個々人の技術力アップを図る。一方、研修員を受け入れる側は研修員との共同作業を通して自分の置かれている環境と他地域との違いを理解し、自国では経験できない生活、文化や伝統技術に関する知識を得る。こうした相互理解こそが、持続的な国際協力にとって極めて大切である。

しかし、実際に行われている様々な研修の中には、研修員のニーズではなく実施する側の都合で組み立てられる場合や研修内容が研修員のバックグラウンドや能力に合致していない場合も見られる。効果的な研修のためには研修内容が研修員のニーズにあっていることは言うまでもないが、そのためには的確なニーズアセスメントとそれに基づいたフレキシブルな研修計画の作成及び実施が必要になる。また、研修の目的を能力強化(Capacity Building)と考えた場合、個々の人材の能力強化と共に、習得した技術や知識が自分の属する組織の中で生かせるためにも、彼等が所属する組織の機能強化(Institutional Building)もまた重要な課題となる。

国際耕種も「人造り・人材育成」を業務の大きな柱として活動してきた。筑波国際センターにおける研修事業への参加、開発調査での研修計画の作成や実施、派遣専門家による農業普及員研修の企画及び実施や技術交換事業、第3国研修への協力などを実施してきている。このシリーズでは、これまで我々が関係してきた業務の中で経験した「人造り・人材育成」活動を紹介して、その中で体験した喜び、不満、運営上の問題点などを掘り下げるとともに、よりよい研修実施のためにそのあり方や意義を再検討していきたい。



筑波国際センターでの南部アフリカ研修業務風景



篤農家からの聞き取り(第3国研修、モロッコ)

## 新シリーズ： マングローブ生態系に学ぶ

### 第1回： マングローブと国際耕種

一般にマングローブを特定の植物の名称と思っている人は結構多いと思うが、正確には潮間帯(満潮時には水面下になり干潮時には地表が現れる様な場所)に生育する耐塩性の高い植物の総称であり、その種類は70-100種ほどあると言われている。世界的には東南アジア、アフリカ、大洋州、北アメリカ、中南米等に広く分布しており、我々に関わりの深いアラビア半島にも分布している。日本では西表島をはじめ、沖縄地方以南がマングローブの主な生育地帯である。

国際耕種とマングローブのつながりには浅からぬものがあり、1980年代初頭にアラブ首長国連邦で水産養殖の専門家によって行われていたマングローブ林造成試験に関わり合ったことが振り出しになっている。さらに、AAI周辺の研究者などと共にMAMAS (Marine Aquaculture and Mangrove Afforestation in Sabkha)を立ち上げ、乾燥地域に分布する塩性湿地での植林に向けた情報・知識の蓄積を図ってきた。このような中、2000年4月か



オマーン・スール地区のマングローブ植生

らオマーン国地方自治環境水資源省(MRME & WR)の要請により、「入り江とマングローブ林のリハビリ」という業務でJICA専門家がAAIより派遣されている。ここでは、カウンターパートへの技術指導(移植適地の選定、苗生産、移植、生育管理など)や保全及び管理に関わる政策助言などを行っている。一方、上記の個別専門家派遣と並行して、JICAは2002年6月からMRME & WRの要請に基づき、主要な入り江での自然・社会経済環境を考慮した植林・保全及び開発形態の類型化、各入り江の個別開発案の策定を目的としたマングローブ植林・保全・管理に係わるマスタープラン調査を開始し、国際耕種も共同企業体の一員としてこの開発調査に参画している。

マングローブ生態系は、環境配慮の観点からは、サンゴ礁や湿地と同じく脆弱生態系の一つと見なされている。さらに、マングローブ生態系はラムサール条約の対象となる湿地帯の中にも数多く分布しており、湿地同様、近年とみに生物多様性のゆりかごとして注目を集めるようになって来ている。また、自然におけるマングローブ林の機能(サイクロン等からの沿岸保全機能、水産資源涵養機能、景観保全機能等)が重要視・評価されるようになり、現在では保全や植生回復の重要な対象になっている。しかしその一方では、エビ養殖場等の建設や地域開発のために乱伐され、広大な面積のマングローブ林が現在も失われつつある。

このシリーズでは、国際耕種とマングローブとの長年の関わりや経験(特にオマーンやアラブ首長国連邦を中心とした湾岸及びその周辺地域)に基づいて、マングローブの持つ歴史的、社会・経済的意義、さらには今日の環境保全や地域開発の観点からマングローブ生態系とどのように関わりを持っていくかについてじっくり考えてみたい。



気根の発達とヒルギダマシの花 (オマーン・シナス地区)

## ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ～日本における様々な動き～

### 最終回: 消費者へ向けた発信、合鴨水稲同時作、そして山田の中から息吹を…

神奈川県横浜市青葉区の田園都市線沿いに、オーガニック製品をそろえるモール(商店街)「プランツ」がある。衣・食・住にわたってオーガニック製品の紹介と販売及びそのライフスタイルを提案するレストラン・バーやショップ、建材ショールームが集まるモールであり、定期イベントやギャラリーも催される。オーガニック商品に関心をもつ消費者に向けた、または関心をもたせるための発信の形としてのひとつであるが、オーナーは衣・食・住におけるオーガニックな暮らしに興味を持ち、それに関連する商品を世のために広めたいと考えている。同時に、有機野菜農家と提携をし、それらの野菜を他のデパートやレストランにも卸している。有機だからといって泥っぽいわけではなく、清潔感があふれ落ち着いたお洒落な雰囲気、店外には植物や鉢などの園芸商品が、店内には有機野菜、加工食品、服飾衣料、生活小物、雑貨、台所用品、書籍など吟味された商品が陳列されている。人気商品は品切れご免になることが多く、隣のレストランでは、有機野菜中心のメニューが揃い、訪れた土曜日は着席まで30分ほど待つという繁盛ぶりであった。

福岡県嘉穂郡桂川町で農業を営む古野隆雄氏。同氏は、「一鳥万宝いちちようばんぼうあいがも農法が切り開く楽しい稲作栽培の世界」と謳い、水田の中で合鴨を飼いながら(草や虫を食べて糞をすることにより有機物を供給し、泳ぎながら泥をかき混ぜ、口ばしや足で稲の株元を刺激することで生長が促進される。)、アゾラ(シダ植物のアカウキクサで合鴨の餌となる。)とドジョウと一緒に育て水稲を栽培する“アゾラ魚合鴨水稲同時作(略して合鴨農法)”を実践する日本における先駆者として知られる。つまり合鴨農法とは、水田で稲作と畜産と水産を同時に行うのである。田圃と裏山を所有し、20数年間完全無農薬有機農業を貫き、その営農スタイルは水稲・輪作で野菜及び大豆麦穀類・果樹・菌茸栽培、鶏卵、養蜂、農産加工(味噌、もろみ、漬物)、合鴨ヒナ孵化など多岐にわたり、いわゆる家族総出で楽しく有畜複合農業を行いながら、消費者と直接顔を合わせながらの取引を行っている。専業農家に育った古野氏は、雑草と格闘した10年間の後、水田稲作における合鴨農法に取り組んで以来、アジアの国々の農村を訪ね歩き、合鴨を通して農民との交流をはかりながら合鴨農法のみならず多くの事を学んできたという。現在も、国内外を問わず声がかかると二つ返事で御夫婦一緒に飛び回るほか、訪問・見学・研修を随時受け入れるなど多忙な毎日である。同氏の軽トラには「自然と人間が調和する社会を」という標語が掲げられているが、ここに古野氏の思いが表れている。

我々が、本当に心豊かな暮らしをしていくためにはどのような生活のスタイルが望ましいかは、グローバルスタンダードを謳う貨幣経済社会を基盤とする米国や日本のみならず、世界の国々での人やモノが密集した殺伐とした都市部や農村が荒廃する姿といった現況を見れば自ずから答えは出ている。これからの農業においても、換金作物を大面積栽培するといった貨幣経済にのせたビジネスと考える単一作物生産大規模機械化農業ではなく、家族皆で米・麦穀類や野菜を作り、家畜を飼うといった自給ベースの小規模家族農業も一つの選択肢ではないか。それは、世界中のそれぞれの国に共通する農的生活のスタイルで、日本でも伝統的農業が行われていた昭和40年代までは当たり前に見ることができた農村の風景であり、それは原風景ともいわれる美しい日本の暮らしの姿であった。農を中心として、林産、水産、そして様々な手わざが加わることによって生活に本当に必要な物を必要なだけ生み出し、お互いに助け合いながら、物々交換によってものが循環していく伝統的な暮らしこそ、真に心豊かで健やかで楽しい暮らしの姿ではないだろうか。国際耕種としても、そのようなあるべき暮らしの姿を如何に現代社会と融和を図っていくのかを、積極的に検討していきたい。そして、山田の中からこそ再び生き活きとした息吹が芽生えるような社会であるようにと願う。



オーガニック製品ショップ「プランツ」



元気に泳ぎ回る合鴨



左: 合鴨農法区、右: 慣行農法区